（論　文）

勾玉の宗教的性格について

瀧　音　　大

キーワード

勾玉　　祭祀　　霊魂　　信仰　　墓

はじめに

勾玉は，縄文時代前期からすでにみられ，形状は「く」もしくは「C」の字を呈していることが多く，端には紐を通すための孔があけられているものと定義される。出土範囲は日本列島全域にわたり，材質はヒスイや碧玉，瑪瑙のほかにも琥珀やガラス，金，土など多様性をみせている。また，勾玉が，形態や材質，その意味合いなどの変化は置くとして，縄文時代から奈良・平安時代までという，長期的且つ継続的に人々の生活の中に溶け込んでいるという事実は，他の考古遺物を見渡しても稀有な存在である。さらに，『古事記』や『日本書紀』などの文献史料の中には「勾玉・曲玉」の記述があり，考古学者だけでなく，国文学者，歴史学者などによる視野の広い勾玉研究が古くからおこなわれている。

勾玉研究のはじめは，国学者の立場から勾玉をみた谷川士清の『勾玉考』〔谷川 1774〕や考古学的な観点から勾玉をみた木内石亭の『曲玉問答』〔木内 1936〕などがあげられ(註1)，江戸時代にはすでに勾玉を研究対象として取り扱っていた(註2)。それ以降，戦後まもなくまでは，勾玉研究は，起源の解明や神話の中にみられる勾玉，すなわち『日本書紀』の「八坂瓊」や『古事記』の「八坂勾璁」の実態解明や性格などを明らかにすることなどを研究の主目的にしており，勾玉という遺物それ自体に対しての研究が盛んであった。

しかし，1950年代以降に入り，学問の細分化が進むにつれて，考古学的視点による勾玉を用いた人々への精神文化的な考察は，以前のようにはおこなわれなくなっていく。それに代わって，この時期になると，発掘調査件数の急増により玉作り関係の遺構や遺物が増加したことをうけて，その膨大な資料を用いた研究が多くなされるようになる。考古学からの勾玉への研究アプローチは，時代・地域ごとに形態の分類・変遷や分布範囲の想定，製作工程の復元，生産と流通の解明，玉作り集団と政権との関係性などを中心におこなわれるようになり，勾玉自体の研究というよりも，勾玉を含んだ「玉の文化」を研究の対象として取り扱う傾向に変わっていった。

そうした中，近年では勾玉を用いて，原始・古代の人びとへの精神文化的考察が再度試みられてはきている。しかしながら，その研究は未だ少なく検討が不十分といった状況にある。

たきおと　はじめ：早稲田大学大学院　人間科学研究科

そこで本稿では，まず，現在まで蓄積されている研究史を整理し，従来推測されている勾玉の宗教的性格の全体像を把握する。その後，古墳時代の島根県下から出土した勾玉に注目してその集成をおこない，出土状況や出土勾玉の材質の変化などと研究史の整理でみられた勾玉の宗教的性格との比較をおこなう。その上で，古代の人々が勾玉に込めたであろう意味について若干の考察をおこなうことにしたい。

本稿に入る前に，研究史との比較資料として島根県出土の勾玉を用いた理由を述べるならば，まず，勾玉の宗教的性格を推測していくにあたり，地域と時代を限定的にする必要がある。なぜなら，勾玉の出土には時代ごとに地域性がみられるからである〔米田 2009・2011〕。そこで，本稿では古墳時代の代表的な勾玉生産地域であった島根県に注目して，分析をおこなうことにしたのである。

勾玉の集成作業は，島根県古代文化センターが中国地方から出土した玉製品を集成しており〔島根県古代文化センター 2005〕(註3)，その成果に筆者が資料の追加をおこなった。

なお，本稿における「宗教的」とは，人びとが物と観念を区別し，神や霊魂を認識している場合に用いて書き進めていく(註4)。

1．研究史からみた勾玉の宗教的性格について

1）文献史学からみた性格

まず，文献史料からのアプローチとしては，喜田貞吉氏の研究があげられる。喜田氏は，本来のタマの名称について，孔を穿ち緒を通す個々の物体その物の事ではなく，それはむしろ第二次的転用の名称とし，「当初は是等の個々の物体を，所謂「タマの緒」を以て連絡したもの」の名称であったとしている〔喜田 1933〕。そして，「マガタマなる古語が緒を以て綴った連珠の稱」であり，勾玉がただちに「マガタマ」とよばれていたとはいえないことを指摘している(註5)。その一方で，人の死と玉の緒が絶えることを対応させて考えていることから，古代の人びとにおける「玉」の思想の中には，霊魂との関係性も含まれていたこともよみとれるとしている。

次に，水野祐氏は勾玉の原義の究明するにあたり，①発生の時期，②最古のオリジナルな形態，③原石の種類を重視して検討を試みている〔水野 1983〕。水野氏は，「勾玉の起源は，石器時代中期というきわめて古い時期にさかのぼり，それはたんなる装身具として発生したものではなく，呪的護符的意義をもって身につけられていたものだと思われる。やがてその信仰や習俗は広く一般的にひろまり，弥生時代を通じて古墳時代にいたるまで，とくに一部の海の生活に関係する人々の間で継承されていた。航海の神を信仰し，漁業の営み，航海通商にたずさわっていた，いわゆる広義での古代航海者・海人部族の間には，勾玉信仰が存在した。そしてそれは航海や潮の干満に関係の深い月神の象徴として，月の像をかたどった呪的護符として貴ばれたものであり，ここに勾玉の起源があると私は考える」と述べ，当時定説化されつつあった勾玉の獣牙起源説を否定し(註6)，勾玉を月神の象徴であるとしている〔水野 1969〕。また，勾玉の原義には，色彩も考慮する必要があるともしており，勾玉の本来的色彩は青色を尊重していたことも推測している。

2

2）民俗学・人類学などからみた性格

次いで，民俗学・人類学などからみるならば，坪井正五郎氏は勾玉を身につけることに対して，獣類の歯牙の威力を恐怖し，それを自身に身につけることで，それのもつ呪力を自らも得られるという呪的信仰が基礎にあると述べ，勾玉の獣牙起源説を唱えている〔羽柴 1886，坪井 1891〕。

それに対して，中山太郎氏は干し固めた肝臓を胸に懸けたのが，勾玉の古い形であるとし，勾玉の肝臓模倣説を唱えている〔中山 1930〕。その性格については，①山の神に捧げた心臓に対して自

分らがこれを所持することは神の加護をうけるもの，②性器崇拝の結果はこれに呪力の存するもの，③原始時代の勇者の徽章の３つが考えられるとしている。

また，金関丈夫氏は，勾玉が鈎状をしていることに注目し，「もとは獣の牙から起こったとしても，動物の牙そのものが，餌を口から離さないための装置である。牙も勾玉も，その他の鈎状の飾りも，みなこの，魂拘禁具とみるべきであろう」とし，さらに外部から侵入する邪霊を引きとめる役割も備わっていることを推測している〔金関 1975〕。さらに，金関氏は，魂の色と勾玉の色を青白色(註7)に揃えることによって，その同色性によって，魂を引き寄せ，その鈎でつなぎとめると考えている。そして，魂の形が球状の頭と細長い尻尾の形をしていると推測したたうえで，勾玉の形が単なる鈎ではなく魂の形でもあるとする。

一方，折口信夫氏は，「人間の身体に出たり這入たりするところの抽象的なたま（霊魂）を具体的にしむぼらいずせる玉をばたまと称して，礦石や動物の骨などを此語で呼」ぶと述べ，「霊魂のたまも，まじっくに使用せられるゝ珠玉も，所詮同じものであつて，一つの物体の両面の様なものである」としている〔折口 1996〕。また，折口氏は，霊魂が中宿として色々な物質に入るものであると考えており，霊魂の貯蔵所の１として玉を想定している。そして，玉と玉とを触れ合わせ音を鳴らすことにより霊魂が出てくるとも述べている〔折口 1978〕。

その他に，玉に霊魂を鎮める役割を想定している研究者も多い。たとえば，野本寛一氏は，静岡県にある焼津神社の御神体（玉）が，水霊を鎮める役割を担っていると考えている〔野本 1975〕。

望月信成氏は，天照大神を太陽，月夜見尊が月，そして素戔嗚尊は嵐・颱風の神格化であり天体との関係が深いことを述べた上で，勾玉の起源を動物の牙とすることを肯定的にとらえながらも，「たまたま“きば”の形が天体の一つの星座の形と共通していて，やがて“きば”を首にさげて勢力や権勢を表象する意味よりも，一歩進んで，天体信仰にまで発展した」とし，「曲玉の“おたま杓子”のような形は北斗七星の形」であるとする興味深い説を唱えている〔望月 1961〕。

３）考古学からみた性格

最後に考古学の立場からみるならば，高橋健自氏は，坪内氏の勾玉獣牙起源説を支持した上で，勾玉の輪郭に護身の力があるとしている〔高橋 1928〕。

後藤守一氏は，京都府にある久津川車塚古墳（５世紀前半）〔梅原 1920〕から出土した5000点を越える勾玉が，あたかも石棺内に散布されたかのような出土状況をみせていることに注目して，古墳出土の玉類には，被葬者に対する服飾品とする以外の用途が考えられると指摘している〔後藤 1940〕。この後藤氏の指摘がなされて以降，各時代における玉の出土状況などが厳密に検討されるようになり，玉の用途において装飾性以外の一面にも研究者の目が向けられていくようになる。

また，木下尚子氏は，勾玉の出土状況などを踏まえ，縄文時代から古墳時代までの勾玉について，その性格を網羅的に述べている〔木下 2000，2005〕。まず，縄文時代の勾玉が，「鈎」(註8)と「結縛」(註9)の意味合いが根底にあるとして，個人個人の魂を体に結び留め，さらに，肉体から魂が出ていこうとする際には，魂を引っかけて体内から出ていくのを阻止する機能を想定している〔木下 2000〕。次に，弥生時代の勾玉については，「権力者の生命を守り，かつ権力の序列に対応した体系を備える装身具」へと変化していくとしたが，一方では頭部に放射状の刻み目を有する，いわゆる，丁字頭勾玉の存在から，縄文時代の勾玉にみられた「結び」の性格も継続的に持ち続けていたとも述べている〔木下 2000〕。また，縄文時代と異なり，弥生時代の墓に勾玉が用いられるようになることについては，「魂の再生を信じた農耕社会ならではの考え方が，弥生人に死んでなお勾玉を着装させたのだろう」と解釈している〔木下 2000〕。古墳時代の勾玉は，弥生時代の勾玉と同様に，霊

3

的なものを肉体に留める役割を想定しつつも，①他の玉類と綴って用いられること，②勾玉の材質に多様性がみられること，③祭祀に用いられるとされる石製模造品の登場，の３点を根拠に，弥生時代から古墳時代に移り変わっていくなかで，勾玉の意味合いが変化していることを指摘している〔木下 2000〕。また，「身分表示の中心的役割を担うが，祭祀具セットの影響により，古墳時代後半ついに伝統的な呪力を失う」としており，古墳時代の中においても，勾玉の意味合いに変化がみられることも述べている。

寺村光晴氏は，当時の人びとが有していたであろう「たま」の概念規定や時間経過による認識の変化を文献資料と考古資料を用いて，明らかにしていこうと試みている〔寺村 1972・1980〕。具体的には，『日本書紀』の中にみられる「たま」の記載を集め，神代から持統までの時間の流れの中で，「たま」を記す際に用いる漢字がどのように変化しているのかを追及している。その結果，人名に関しては，４世紀に「瓊」，５世紀中葉以降の「玉」，６世紀中葉以降で「珠」と変遷がたどれ，崇神・仁徳・継体のいわゆる三王朝交代〔水野 1952〕を期に，「たま」に関する観念が変化していることを指摘している。一方，考古学的にみた場合，古墳時代の玉の様相には，前・中・後の３つの画期があることを述べ，第１期における玉の性格は，呪的・宝的性格がみられるとしている。第２期では，滑石製模造品の種類が古墳と祭祀遺跡とでは異なっていることなどを根拠に，祭祀司掌者による神祭りの玉と首長が直接司る玉の２つに性格が分離していくとしている。また，この時期に関して，①１期でみられた硬玉製勾玉と碧玉製管玉といった，いわば統一された材質・色彩・形態観が多様化していくことが古墳の副葬にみられ，②形式化，粗造化された滑石製模造品の盛行は祭祀遺跡で確認でき，③子持勾玉の出現は単独出土するようになるという，３つの特徴がみられるとしている。その上で，呪的・宝的性格を保有していた第１期の玉が，宝的性格は①にみられ，呪的性格から祭性への変化は②に，呪性の伝統的残存は③にそれぞれみられるとした。第３期には，祭祀遺跡や子持勾玉が減少することに加え，古墳への副葬品も多彩化がみられなくなる一方で，仏教と玉との関係性が色濃くみられるようになることを指摘している。

島田貞彦氏は，古墳から出土する頸飾りをした埴輪の観察から，勾玉の着装時における正面観に着目し宗教的性格について言及している〔島田 1940〕。島田氏は，「従来勾玉の形態觀は常に曲れる鉤状の側面を以って正容とする意識にとらはれ，側面觀よりする彎曲の點に主觀をおいてゐるが，これは少なくとも正面觀よりする直線的の正容を本體としてみるべきもの」とし，「勾玉の本質は横に曲れるものではなく，云はゞ前につき進む無限の形を上曲終止したもの」であるとした。そして，勾玉を直玉としてとらえ，神社建築における「千木の高く天空を摩する」といった精神と同じくすると推測している。

また，乙益重隆氏は，勾玉を含む玉類を壺や甕などの容器に納め，土の中へ埋める行為について述べられており，その性格は地鎮信仰，すなわち「土地の神に対する信仰」と関係があるとする〔乙益 1987〕。そして，これを古代中国でみられる瘞玉信仰に基づくものと推測している。この他にも，古代中国の思想と勾玉の用途が関係しているとされる事例がある。それについては，辰巳和弘氏による唐古・鍵遺跡〔田原本町教育委員会 2008〕から出土したヒスイ製勾玉に対する解釈があげられる〔辰巳 2004〕。辰巳氏は，本来的に褐鉄鉱の殻状容器の中には，中国で仙薬として取り扱われている粘土が入っていることを踏まえて，なぜ，この殻状容器の中にヒスイ製勾玉２点(註10)が入れられていたかついて考察を加えている。そして，この容器の中にはすでに仙薬をいれるものとして認識があり，仙薬とヒスイ勾玉を類似した性格としてみていた可能性を示唆している。

次に，大場磐雄氏は，勾玉に呪力・霊力が内在していること，さらに連接することでその呪力・霊力を強化できることを，当時の人びとが考えていた可能性を指摘している〔大場 1962〕。この考

えが子持勾玉の性格についての解釈に端を発するものであるにせよ，勾玉の宗教的性格を考える上で大変興味深い考えである。

一方，石田茂作氏は，正倉院に所伝する玉を紹介するとともに，奈良時代の玉の用途について①装身具として②器具として③器物の装飾として④鎮壇具として⑤観賞用としての５つの用途を提示している〔石田 1940〕。これは，古墳時代から奈良時代に移り変わるさい，勾玉の宗教的性格が急激に変化したことを示しており，事実，奈良県飛鳥寺の塔心礎から金銅製舎利容器とともに，硬玉製勾玉２点を含む多くの玉類が舎利荘厳具として用いられていたり，奈良県の東大寺法華堂にある不空羂索観音像（740年頃）が被っている宝冠には，ヒスイ，水晶，ガラス，琥珀といった様々な材質の勾玉が垂れさがっている〔藤田 1992〕。

最後に，森浩一氏は奈良時代において寺院などでみられる大半の勾玉が，平城京や寺院をつくる際に，壊した多くの古墳からでてきたものであることを踏まえ，寺院における勾玉の利用には，ただ単に再利用といった意味合いというよりも，「被葬者を鎮める」意味合いが多分に含まれていたと推測している〔森 1992〕。

２．勾玉の用途

１）墓に用いられる勾玉の材質と出土状況

上述した研究史を踏まえ，さらに，島根県にみられる古墳時代の勾玉出土遺構および勾玉の材質（第１表～第５表）を参考にして，勾玉の用いられ方について考えてみたい。まず，墓に関係する遺構としては，古墳や横穴墓，土坑墓，石棺墓がある。古墳時代前期は，計11遺跡11遺構で勾玉が出土しており，すべて古墳である。出土勾玉の総点数は18点，材質にはヒスイ・碧玉・瑪瑙・ガラス・琥珀などが用いられている。共伴する遺物には，鏡や刀子，管玉などが多いが，大刀や紡錘車，臼玉，石釧，土師器なども少量みられる。

続いて，古墳時代中期では，計11遺跡７遺構に勾玉が確認されており，遺構の種類の内分けは古墳６件，土坑墓１件である。出土勾玉の総点数は25点確認されており，材質は碧玉や瑪瑙，ガラスの他に新しく水晶や滑石が追加され，ヒスイはみられなくなる。共伴遺物には管玉と新しく加わったガラス小玉が多くみられ，その他に鏡や大刀，刀子，須恵器，水晶製玉類，滑石製臼玉もみられる。

古墳時代後期になると，54遺跡69遺構と大幅に増加し，内分けは古墳25件，横穴墓43件，土坑墓１件である。また，出土勾玉の総点数も125点と急激に増加する。材質には，瑪瑙が主体を占め，次に碧玉や水晶が多い。その他にもヒスイや蛇紋岩，滑石もみられる。共伴遺物には，管玉や丸玉，ガラス製小玉などの各種玉類がみられるようになり，特に水晶製玉類が多用される傾向がある。また，大刀や刀子などに加え，耳環や馬具が新たにみられるようになり，須恵器が伴う場合が多くなるのも特徴である。松江市菅田横穴群の18号横穴では，土製丸玉も出土している。

古墳時代終末期では16遺跡21遺構と減少し，内分けは古墳６件，横穴墓15件になる。出土勾玉の総点数は26点となり，材質は瑪瑙や水晶がやや多く，碧玉もみられる。共伴遺物は，管玉などの玉類特に水晶製玉類が引き続き多く，他にも大刀，刀子，耳環，馬具，須恵器などがみられ，後期と同様の様相がみてとれる。しかし，全体的にみると，後期に比べ共伴する玉類の量の減少やそのほかの遺物の種類も多様性を欠いたように思われる。

以上，時期別に勾玉の出土傾向を概観してみた。次に勾玉の出土状況から，勾玉の用いられ方をみてみる。

松江市にある奥才34号墳では，土師器の壺の中から勾玉２点が確認されている〔鹿島町教育委員会 1985〕。報告書によると，土師器壺の肩部付近まで５㎝大の礫を詰め込み，その上面に碧玉製石

釧を置き，その釧の中に琥珀製勾玉１点を入れ，捩文鏡で蓋がされていた。礫の詰め込みは少量ずつおこなわれ，その都度顔料を塗布もしくは散布されていた。また，碧玉製勾玉１点は釧の中には納められてはおらず，壺の中に敷き詰められた礫の上に置かれていた。さらに壺内には針状鉄製品も確認されている。そして，勾玉などが納められた壺には，焼成前に上部を切断されたもう１つの壺がかぶせられ，土の中に埋められていた。しかし，この極めて特異な事例に関して，報告書の作成者は，便宜的に古墳でみられたことになってはいるが，壺が出土した土坑墓が埋葬施設と断定はできないとしている。

第１表　島根県における古墳時代の勾玉出土遺構①　　※玉作り遺跡は除く

No.	遺　跡　名	所在	時　代	出土遺構	材質：個数	備　考
1	五反田古墳群	安来市	古墳時代前期末	1号墳第1主体部	ヒスイ:2	円墳　碧玉管玉1　緑色凝灰岩碧玉17 小形倭鏡（重圏文鏡）　ヤリガンナ状鉄器
2	造山古墳群	安来市	古墳時代前期後半	1号墳第2石室	ガラス:1	碧玉　紡錘車
3	寺床遺跡	松江市	古墳時代前期	1号墳第1主体部	ヒスイ:1	長方形墳　ヤス状鉄製品　鏡　鉄製大刀　糸魚川産
4	柴尾古墳群	松江市	古墳時代前期末	3号墳第1主体部	ヒスイ:1	方墳　鉄鏃　糸魚川産
5	石田遺跡	松江市	古墳時代前期末	石田古墳 主体部	ヒスイ:1 瑪瑙:1 細粒酸性凝灰岩:1	円墳　碧玉管玉6　ひん岩垂玉1　細粒酸性凝灰岩小玉　ガラス小玉1　仿製内行花文鏡
6	奥才古墳群	松江市	古墳時代前期後半	第Ⅴ支群34号墳	碧玉:1 琥珀:1	方墳　緑色凝灰岩石釧1　土師器壺内に石釧と捩文鏡出土　針状鉄製品ほか　壺内出土の石釧及び鏡を蓋にした中に琥珀勾玉出土
7	奥才古墳群	松江市	古墳時代前期初頭	第Ⅷ支群55号墳	碧玉:1	方墳　ガラス管玉1
8	上野遺跡	松江市	古墳時代前期末	1号墳第1主体部	ヒスイ:1 瑪瑙:1 ガラス（青）:1	大型円墳　緑色凝灰岩管玉9　碧玉管玉31　刀子　槍　剣　仿製斜縁神獣鏡ほか　水銀朱付着
9	斐伊中山古墳群	雲南市	古墳時代前期	3号墳第1主体	緑泥石片岩:2	方墳　緑泥石片岩管玉14　緑泥石片岩臼玉2　刀子
10	森遺跡	雲南市	古墳時代前期	SI25 竪穴建物	土製:1	遺跡から他に勾玉2点確認
11	大寺古墳	出雲市	古墳時代前期末	墳裾第3トレンチ	碧玉:1	前方後円墳　花仙山産
12	出雲大社境内遺跡	出雲市	古墳時代前期末	古墳時代前期 遺構面	蛇紋岩:1 瑪瑙:1	滑石臼玉12
13	塩津山遺跡	安来市	古墳時代前期後葉 ～中期前葉	SI08 覆土 竪穴建物	瑪瑙:1	土師器（高坏・甕）　瑪瑙石核　二次被熱している可能性あり
14	熊谷遺跡	雲南市	古墳時代前期末 ～中期	三刀屋熊谷2号墳 第1主体部	瑪瑙:1	方墳？　刀子　重圏文鏡
15	山持遺跡	出雲市	古墳時代前期 ～中期	土器群71	滑石:1	須恵器（蓋坏・高坏）　土師器（壺・甕）
16	細曽古墳群	松江市	古墳時代中期	1号墳第1号主体部	瑪瑙:2	緑色凝灰岩管玉21　方墳　刀子
17	的場遺跡	松江市	古墳時代中期後葉	SK15 土坑墓	瑪瑙:1	碧玉管玉3　ガラス小玉192
18	金崎古墳群	松江市	古墳時代中期後葉	1号墳 竪穴式石室	碧玉:5 瑪瑙:6 ガラス:1	前方後方墳　碧玉管玉4　碧玉棗玉2　水晶垂玉1　ガラス小玉364　滑石子持勾玉2　滑石臼玉　仿製内行花文鏡　直刀　鉾　剣　刀子　有孔円板状青銅製品　須恵器（大形ハソウ・小形ハソウ・有蓋高坏異形連管小壺・器台）ほか
19	月廻古墳群	松江市	古墳時代中期？	4号墳	紫水晶:1	碧玉管玉5　ガラス小玉15
20	寺山小田遺跡	松江市	古墳時代中期後葉	SI01 竪穴建物	瑪瑙:1	碧玉有稜棗玉1　土師器（坏・壺・甕・器台・甑・高坏）　須恵器坏　鎌　鉄鏃　鎌　刀子　碧玉製切子玉　祭祀関係遺構の可能性。
21	長砂古墳群	松江市	古墳時代中期後葉	4号墳 主体部	瑪瑙:1	方墳　ガラス小玉3　鉄鉾
22	布志名大谷遺跡	松江市	古墳時代中期	北Ⅱ区1号石棺墓	水晶:1	未成品
23	中野清水遺跡	出雲市	古墳時代中期	Ⅳ区 3層	瑪瑙:1	
24	経塚山古墳群	出雲市	古墳時代中期？	主体部	滑石:6	碧玉？　管玉10　滑石棗玉48
25	大家八反田遺跡	大田市	古墳時代中期後半	旧河川・溝跡	滑石:1 土製:7	祭祀跡関係遺構
26	高広遺跡	安来市	古墳時代後期末	Ⅳ-3号横穴	蛇紋岩:1	須恵器（蓋・坏身）　金環　銀環　直刀　刀子 人骨　ほか
27	小汐手横穴墓群	安来市	古墳時代後期後半	A区3号穴	不明石材:1	小玉30
28			古墳時代後期後半	B区9号穴	不明石材:1	管玉3　ガラス小玉1
29			古墳時代後期後半	C区3号穴	瑪瑙:1	
30	堤谷横穴	安来市	古墳時代後期後半	Ⅰ群1号横穴	瑪瑙:1 水晶:1	緑色凝灰岩管玉23　碧玉管玉5　水晶切り子玉8 滑石小玉37　ガラス小玉26
31	岩屋口南遺跡	安来市	古墳時代後期後半	Ⅱ-2号横穴	瑪瑙:2	碧玉管玉2　水晶切り子玉2　ガラス小玉7 須恵器（提瓶・坏身）　土師器甕　耳環　紡錘車　5体分の人骨　ほか

6

第２表　島根県における古墳時代の勾玉出土遺構②　　※玉作り遺跡は除く

No.	遺　跡　名	所在	時　代	出土遺構	材質：個数	備　考
32	臼コクリ遺跡	安来市	古墳時代後期	N-2号横穴	瑪瑙:1 水晶:1 滑石:1	水晶切り子玉1　ガラス管玉2　ガラス小玉16 大刀　刀子　鉄鏃　須恵器（蓋坏・ハソウ・壺・高坏提瓶）　耳環
33			古墳時代後期	S-5号横穴	碧玉:1	須恵器（蓋・坏身）
34			古墳時代後期後半	F-1号横穴	瑪瑙:1 水晶:1	水晶切り子玉2　ガラス小玉1　須恵器（蓋・坏身・提瓶）　刀子　耳環　ほか
35			古墳時代後期後半	F-2号横穴	瑪瑙:1	瑪瑙丸玉1　ガラス小玉6　須恵器（坏蓋・坏身・皿・提瓶）　耳環　大刀　刀子　人骨　ほか
36	仏山古墳	安来市	古墳時代後期	箱式石棺	水晶:1	
37	今若峠古墳群	安来市	古墳時代後期後半	1号墳	不明石材:1	不明石材管玉1
38	かわらけ谷横穴群	安来市	古墳時代後期後半	11号横穴	瑪瑙:1	
39	経塚鼻遺跡	安来市	古墳時代後期	3号墳	瑪瑙:1	切り子玉　ガラス玉　円墳　高坏　甕　須恵器　刀子　ほか
40	岩屋谷古墳群	安来市	古墳時代後期	1号墳	ヒスイ:1	
41	中曽根横穴群	安来市	古墳時代後期	1号横穴（左）	碧玉:1 瑪瑙:1	碧玉管玉1
42	渋山池古墳群	松江市	古墳時代後期後半	2号横穴	水晶:1	坏蓋　刀子　直刀片　鏃 TK43後半～TK217まで追葬
43			古墳時代後期後半	5号横穴	水晶:1	ガラス小玉6　坏蓋　鏃　耳環 TK43後半～TK217まで追葬
44			古墳時代後期後半	15号横穴	瑪瑙:1	高坏　ハソウ　壺　耳環　ほか TK43後半～TK217まで追葬
45	堤谷古墳群	松江市	古墳時代後期	1号墳	瑪瑙:1	未成品
46	島田遺跡	松江市	古墳時代後期後半	1区2号横穴	瑪瑙:5	碧玉管玉3　水晶丸玉1　水晶切り子玉6　水晶三輪玉5　ガラス丸玉6　絞具　吊金具　鏡板　ほか
47			古墳時代後期後半	4区15号横穴	不明石材:1	須恵器坏蓋　耳環　刀子　人骨　ほか
48			古墳時代後期後半	6区10号横穴	瑪瑙:6	碧玉管玉2　水晶丸玉3　水晶切り子玉9　ガラス丸玉1　ガラス小玉1　刀子　弓金具　須恵器　耳環
49			古墳時代後期後半	6区13号横穴	碧玉:1	須恵器坏　土師器甕 平安時代後期に侵入行為あり
50	古城山横穴群	松江市	古墳時代後期	1号横穴	瑪瑙:1	
51	前平古墳群	松江市	古墳時代後期	3号墳	不明石材:1	
52	常熊古墳群	松江市	古墳時代後期	横穴式石室	瑪瑙:1 水晶:1	水晶切り子玉2　ガラス小玉10
53	菅田横穴墓群	松江市	古墳時代後期	3号横穴	碧玉:1 瑪瑙:1 水晶:1	斑状輝石小玉1　安山岩小玉1　ガラス管玉　ガラス小玉
54			古墳時代後期	18号横穴	瑪瑙:1 水晶:1	碧玉管玉1　水晶切り子玉2　琥珀棗玉2　ガラス小玉　土製小玉
55	米坂古墳群	松江市	古墳時代後期後半	埋葬施設C （箱式石棺）	瑪瑙:1	碧玉管玉1　須恵器　墳丘を持たない埋葬施設
56	岡田薬師古墳	松江市	古墳時代後期後半	石室	水晶:1	碧玉管玉3　水晶丸玉1　ガラス管玉1　ガラス丸玉70
57	天神社裏山古墳群	松江市	古墳時代後期	3号石室	瑪瑙:2	水晶切り子玉1
58	早稲田古墳	松江市	古墳時代後期	不明	瑪瑙:1	
59	臼畑古墳	松江市	古墳時代後期	箱式石棺	ヒスイ:1	銀環　鉄鏃　糸魚川産　ハソウ内から出土
60	岩屋遺跡	松江市	古墳時代後期後半	Ⅰ区4号墳 SX01	碧玉:2	未成品
61	岩熊横穴	雲南市	古墳時代後期	不明	碧玉:	
62	星野横穴群	雲南市	古墳時代後期	不明	不明石材:1	
63	叶廻横穴群	雲南市	古墳時代後期	不明	不明石材:1	
64	要害横穴群	雲南市	古墳時代後期	不明	不明石材:1	
65	森谷横穴群	雲南市	古墳時代後期	B群1号穴	不明石材:1	
66	東下谷横穴群	雲南市	古墳時代後期	東下谷5号横穴 前庭部	瑪瑙:1	鉄斧　甕　提瓶　坏蓋　大刀　鉋　ほか
67	東下谷横穴墓群	雲南市	古墳時代後期	6号穴	瑪瑙:1 水晶:1	碧玉管玉2　須恵器（坏・提瓶）　鉄鏃　鋤先状鉄器　耳環　ほか
68	伊賀武社境内 横穴墓	仁多郡	古墳時代後期	玄室　床面	瑪瑙:1	碧玉管玉1　ガラス小玉63
69	殿ヶ迫横穴墓群	仁多郡	古墳時代後期後半	3号墓 玄室	瑪瑙:1	ガラス小玉3　耳輪　須恵器坏蓋　埋葬者は女性。
70	原田遺跡	仁多郡	古墳時代後期後半	1区原田古墳 石室周辺	ヒスイ:2 瑪瑙:5	水晶切り子玉3　ガラス丸玉11　ガラス小玉32 須恵器（甕・蓋坏）　刀子　鉄鎌　耳環　辻金具 雲珠　轡　鞘金具　杏葉　装飾付大刀　鉄刀　鉄鏃　鏢　ほか
71	時仏山横穴墓	仁多郡	古墳時代後期	玄室	瑪瑙:6	水晶切り子玉4　ガラス小玉46　ほか 埋葬者は女性

7

第３表　島根県における古墳時代の勾玉出土遺構③　　※玉作り遺跡は除く

No.	遺　跡　名	所在	時　代	出土遺構	材質：個数	備　考
72	すげた横穴墓群	仁多郡	古墳時代後期	不明	不明石材:1	
73	旧阿井中学校農場古墳	仁多郡	古墳時代後期	不明	不明石材:1	
74	小池横穴墓群	仁多郡	古墳時代後期後半	第Ｉ支群 1号穴	碧玉:1 瑪瑙:1	ヒスイ丸玉1　瑪瑙棗玉1　瑪瑙有稜棗玉1　水晶丸玉1　ガラス丸玉46　ガラス小玉178
75	天狗松横穴墓群	仁多郡	古墳時代後期後半	6号横穴	碧玉:1 瑪瑙:4 水晶:1	
76	上塩冶築山古墳	出雲市	古墳時代後期後半	横穴式石室 小石棺	瑪瑙:3 水晶:4	円墳　瑪瑙棗玉2　水晶丸玉6　水晶算盤玉1　ガラス管玉1　ガラス丸玉5　金銀装円頭大刀　大刀矛　銀装吊金具　鉄鏃　銀装鞘金具　金銅製冠　馬具（轡・杏葉・雲珠）　大形刀子　鹿角装刀子　鉤状鉄器　坏蓋　有蓋高坏蓋　銀環　ほか
77	上塩冶横穴墓群	出雲市	古墳時代後期後半	第23支群 7号穴	ヒスイ:1	ガラス小玉181　鉄製輪　轡　刀金具　大刀　政和通宝（1111年）
78			古墳時代後期後半	第35支群 1号穴	瑪瑙:1	ガラス小玉1　須恵器（坏蓋・高坏・壺・甕）　鉄製紡錘車　銅芯鍍金製品　ほか
79	半分古墳	出雲市	古墳時代後期後半	横穴式石室	水晶:1	ガラス丸玉1　ガラス小玉1
80	地蔵堂横穴墓群	出雲市	古墳時代後期	第2支群 1号横穴	碧玉:1	水晶丸玉1
81			古墳時代後期	第2支群 2号横穴	瑪瑙:1	水晶丸玉1　水晶切り子玉1
82	小浜山横穴墓群	出雲市	古墳時代後期後半	C-3号横穴	水晶:1	水晶丸玉1　水晶切り子玉1　ガラス小玉48　須恵器坏身
83	松田谷横穴群	大田市	古墳時代後期後半	Ⅱ群 3号穴	瑪瑙:1	石製紡錘車　耳環
84			古墳時代後期後半	Ⅱ群 4号穴	瑪瑙:1	須恵器　鉄器　耳環　紡錘車
85	諸友大師山横穴群	大田市	古墳時代後期後半	Ｉ群 2号穴	瑪瑙:7	碧玉管玉17　水晶切り子玉5　滑石臼玉260
86	楡ノ木谷横穴群	大田市	古墳時代後期	第Ⅲ支群 1号穴	ヒスイ:2 碧玉:2 瑪瑙:5	碧玉管玉7　瑪瑙丸玉1　不明石材管玉1　ガラス丸玉6　ガラス小玉4
87			古墳時代後期	第Ⅲ支群 4号穴	碧玉:1 瑪瑙:1 水晶:1	水晶切り子玉1　ガラス丸玉2
88	鳥居原古墳	大田市	古墳時代後期	横穴式石室	瑪瑙:1 水晶:1	碧玉3　ガラス小玉1　ガラス臼玉1
89	江迫横穴群	邑智郡 ほか	古墳時代後期後半	第1号横穴	瑪瑙:1	碧玉管玉1　水晶切り子玉2　ガラス丸玉6　ガラス小玉95　ドブ貝　土師器皿　須恵器（蓋坏・ハソウ・壺・短頸壺）　刀子　耳環
90	長尾原古墳群	邑智郡	古墳時代後期	3号墳 横穴式石室	瑪瑙:2	ガラス小玉1
91	高野山古墳群 峠田野地支群	江津市	古墳時代後期	3号墳	不明石材:1	
92	森ヶ曽根古墳	浜田市	古墳時代後期中葉	横穴式石室	瑪瑙:1	
93	鵜の鼻古墳群	益田市	古墳時代後期	E4号墳	瑪瑙:1 不明石材:1	碧玉管玉8　水晶管玉2　水晶切り子玉5　水晶棗玉1　ガラス小玉38
94	北長迫横穴群	益田市	古墳時代後期	不明	瑪瑙:3	
95	南長迫横穴群	益田市	古墳時代後期	2号横穴	不明石材:1	切り子玉　ガラス玉
96			古墳時代後期	6号横穴	不明石材:1	
97	飯の山横穴群	隠岐郡	古墳時代後期	不明	碧玉:5 瑪瑙:3	碧玉管玉1　ガラス管玉1
98	船島古墳群	隠岐郡	古墳時代後期？	16号墳A棺	瑪瑙:1	
99	東笠根古墳群	隠岐郡	古墳時代後期	1号墳	不明石材:1	
100	立石古墳群	隠岐郡	古墳時代後期後半	2号墳	碧玉:1 瑪瑙:1	碧玉管玉1　碧玉切り子玉1　水晶切り子玉1　ガラス小玉1
101	兵庫遺跡	隠岐郡	古墳時代後期	P区	滑石:1	祭祀関係遺跡　滑石管玉7　滑石臼玉14　ガラス丸玉9　土製丸玉91　土師器　須恵器　手づくね土器　鉄製鎌・鏃・刀子　石器　炭化物（大麦・小麦・野桃の種）　コブダイの歯　マダイの骨　ほか
102			古墳時代後期	PN区	瑪瑙:1	祭祀関係遺跡　瑪瑙棗玉1　ガラス丸玉2　土製丸玉37
103			古墳時代後期	P`区	水晶:2	祭祀関係遺跡　滑石臼玉4　ガラス丸玉6　土製丸玉33　土師器　須恵器鉄製鎌・鏃・刀子　炭化物（大麦・小麦・野桃の種）　コブダイの歯　マダイの骨　石器　ほか
104	松江北東部遺跡	松江市	古墳時代後期	SK-15 土坑墓	瑪瑙:1	須恵器坏身　土師器埦　管玉　ガラス玉
105	築山遺跡	出雲市	古墳時代後期 ～終末期	4号墳石室攪乱層	水晶:2	円墳　切子玉　ガラス玉　鉄鏃　辻金具　絞具　刀子　鉄斧　ほか
106	徳見津遺跡	安来市	古墳時代後期 ～終末期	Ⅱ区包含層	水晶:1	6世紀後半～7世紀中頃
107	十王免横穴群	松江市	古墳時代後期 ～終末期	15号横穴	瑪瑙:1	水晶丸玉1　水晶切り子玉1　水晶垂玉1　ガラス小玉2　金環　鉄斧　須恵器蓋坏　鉄鏃　ほか
108	大谷原古墳群	鹿足郡	古墳時代後期 ～終末期	横穴式石室周辺	碧玉:1 瑪瑙:1	碧玉管玉
109	経負坂古墳群	安来市	古墳時代終末期	3号横穴墓 玄室	瑪瑙:1	刀子　鉄刀　人骨

第４表　島根県における古墳時代の勾玉出土遺構④　　※玉作り遺跡は除く

No.	遺　跡　名	所在	時　代	出土遺構	材質：個数	備　考
110	島田遺跡	松江市	古墳時代終末期	1号横穴	瑪瑙:1	大刀　鉄釘　ほか
111			古墳時代終末期	1区1号横穴墓	水晶:1	鏡板　轡　耳環　刀子　鏃　座金具ガラス玉（追葬あり）
112			古墳時代終末期	4区16号横穴墓	瑪瑙:1	須恵器甕　大刀　耳環　ほか　（3回追葬あり）
113			古墳時代終末期	6区4号横穴墓	瑪瑙:1 水晶:1	ガラス玉　蓋坏　刀子　須恵器甕　耳環　人骨
114	十王免横穴群	松江市	古墳時代終末期	8号横穴	水晶:1	水晶丸玉1　水晶切り子玉1　刀子　直刀　鉈
115	亀田横穴群	松江市	古墳時代終末期	北Ⅰ支群2号横穴	瑪瑙:3 水晶:1	
116	宮尾横穴群	松江市	古墳時代終末期	AV号穴	水晶:1	
117				CⅠ号穴	水晶:1	
118				CⅡ号穴	瑪瑙:1	水晶切り子玉5
119	講武岩屋古墳	松江市	古墳時代終末期	石棺式石室	瑪瑙:1	石室付近の畑から出土
120	下布施横穴簿群	雲南市	古墳時代終末期	3号横穴墓	碧玉:3	土製丸玉1　刀子　碧玉は花仙山産
121	東下谷横穴群	雲南市	古墳時代終末期	東下谷4号横穴	不明石材:1	須恵器坏　大刀
122	岩屋寺山横穴墓	仁多郡	古墳時代終末期	不明	瑪瑙:1	碧玉管玉3　水晶切り子玉3
123	小池奥横穴墓群	仁多郡	古墳時代終末期	第Ⅰ支群 4号穴	不明石材:2	不明石材管玉1
124	女良木古墳	仁多郡	古墳時代終末期	不明	瑪瑙:1	
125	平野横穴群	出雲市	古墳時代終末期	東支群3号穴前庭	瑪瑙:1	須恵器（蓋坏・高坏・長頸壺）
126	小浜山横穴墓群	出雲市	古墳時代終末期	F-1号横穴	水晶:1	水晶切り子玉1　須恵器蓋坏　有蓋高坏
127	矢広原古墳	邑智郡	古墳時代終末期	横穴式石室	不明石材:1	管玉　小玉　切り子玉
128	増屋横穴	邑智郡	古墳時代終末期	不明	瑪瑙:1	碧玉管玉17　水晶切り子玉1
129	長尾原古墳群	邑智郡	古墳時代終末期	A1号墳 石室	碧玉:1	碧玉管玉1　水晶切り子玉2　滑石臼玉3
130	塔の本古墳	邑智郡	古墳時代終末期	横穴式石室	不明石材:1	管玉　切り子玉　小玉
131	多沢横穴	隠岐郡	古墳時代終末期	不明	瑪瑙:2	アワビ貝殻の中から出土
132	秋葉山古墳群	松江市	古墳時代前半	3号墳 箱式石棺	不明石材:1	滑石？　臼玉7
133	奥才古墳群	松江市	古墳時代前期後半～後期初頭	第Ⅳ支群29号墳	碧玉:1	
134	徳見津遺跡	安来市	古墳時代後期～平安時代	Ⅲ区上段土器だまり	碧玉:1 水晶:1	碧玉管玉1
135	薦沢A遺跡	松江市	古墳時代後期～奈良・平安時代	A2区 第3層	碧玉:1	
136	中野清水遺跡	出雲市	古墳時代後期～平安時代	Ⅱ区 2層	土製:1	土製丸玉1
137	湯谷悪谷遺跡	邑智郡	古墳時代後期以降	2号横穴	瑪瑙:1	水晶切り子玉3　水晶？　丸玉1　ガラス小玉15
138	高津久横穴群	隠岐郡	古墳時代後期後半以降	2号横穴	ヒスイ:1 碧玉:3 瑪瑙:12	瑪瑙丸玉1　水晶管玉1　水晶丸玉1　水晶切り子玉10　不明石材5　ガラス管玉1
139			古墳時代後期後半以降	3号横穴	碧玉:1 瑪瑙:2 不明石材:1	碧玉管玉4　水晶丸玉1　水晶切り子玉2　不明石材丸玉1　ガラス小玉3
140			古墳時代後期後半以降	10号横穴	瑪瑙:3 不明石材:1	碧玉管玉2　水晶切り子玉1
141	御立山古墳群	安来市	古墳時代	1支群2号墳	不明石材:1	切り子玉1
142	大谷古墳群	松江市	古墳時代	不明	瑪瑙:1	
143	前田遺跡	松江市	古墳時代	貼石遺構付近	瑪瑙:1	琴　建築部材　杓子形木器　火鑽臼　須恵器　土師器　切子玉　臼玉　土鈴　手づくね土器　桃核　ヒョウタンの実　栃の実　ほか
144			古墳時代	河道C遺構外	水晶:1	
145	中野清水遺跡	出雲市	古墳時代～奈良時代	9区包含層	瑪瑙:1	

第５表　各遺構における出土勾玉の材質　　※　　は墓関係の遺構

古墳時代前期

	蛇紋岩	ヒスイ	碧玉	瑪瑙	水晶	滑石	ガラス	琥珀	土	その他	合計
古　　墳		6	3	3			2	1		3	18
竪穴建物				1					1		2
土 器 群						1					1
祭祀関係遺物密集地	1			1							2
合　　計	1	6	3	5	0	1	2	1	1	3	23

古墳時代中期

	蛇紋岩	ヒスイ	碧玉	瑪瑙	水晶	滑石	ガラス	琥珀	土	その他	合計
古　　墳			5	10	1	6	1				23
石 棺 墓					1						1
土 坑 墓				1							1
竪穴建物				2							2
土 器 群						1					1
溝　　跡						1			7		8
合　　計	0	0	5	13	2	8	1	0	7	0	36

古墳時代後期

	蛇紋岩	ヒスイ	碧玉	瑪瑙	水晶	滑石	ガラス	琥珀	土	その他	合計
古　　墳		4	4	23	11						40
横 穴 墓	1	3	10	59	11	1					84
土 坑 墓				1							1
祭祀関係遺物密集地				1	2	1					4
合　　計	1	7	14	84	24	2	0	0	0	0	133

古墳時代終末期

	蛇紋岩	ヒスイ	碧玉	瑪瑙	水晶	滑石	ガラス	琥珀	土	その他	合計
古　　墳			2	2	2						4
横 穴 墓			3	10	7						19
合　　計	0	0	5	12	9	0	0	0	0	0	26

他に松江市にある臼畑古墳からも容器に入った勾玉が確認されている〔島根大学考古学研究会1983〕。この古墳が正式に発掘調査されるときには，墳丘がすでに削平されており，決して状態のよい古墳ではなかった。しかし，箱式石棺とそれに伴う円礫を用いた礫床が検出されており，そこから須恵器の坏身・坏蓋が複数点と鉄鏃２点，銀環１点が出土している。古墳の築造時期については，出土した須恵器から古墳時代後期頃であると考えられている。また，調査以前に出土した遺物もあり，それが須恵器坏身・坏蓋，ハソウ，そして硬玉製勾玉１点である。その出土したハソウの中に勾玉が入っていたことが，報告されているが，詳細は不明である。出土した硬玉製勾玉については，糸魚川産のものとされている。

２）墓以外の遺構で用いられる勾玉の材質と出土状況

次いで，墓以外の遺構には，竪穴建物や土器群，そして遺構は検出されてはいないが，他の祭祀関係遺物の出土が密に分布する場所（以後，祭祀関係遺物密集地とする）がある。古墳時代前期には，４遺跡４遺構から勾玉が出土している。内分けは，竪穴建物２件，土器群１件，祭祀関係遺物密集地１件である。勾玉は計５点，材質は瑪瑙や滑石，土製がみられる。共伴遺物は遺構ごと多様

性がみえ，臼玉のみや土師器・須恵器のみの場合もある。

古墳時代中期は，４遺跡４遺構で勾玉が確認されており，内分けは竪穴建物２件，土器群１件，旧河川・溝跡１件である。勾玉の総出土点数は11点を数え，材質は前期と同様の瑪瑙，滑石，土製がみられる。共伴遺物については，前期と同様で遺構ごとに様相が異なっている。たとえば，同じ竪穴建物でも土師器と瑪瑙の石核のみが出土する遺構がある一方で，勾玉と共に切子玉や棗玉，鉄鎌，刀子，須恵器，土師器などさまざまな種類の遺物と出土している竪穴建物もみられる。

古墳時代後期になると，１遺跡３遺構で計４点の勾玉がみられ，材質は瑪瑙や滑石，そして水晶が新しく加わる。遺構はすべて祭祀関係遺物密集地である。共伴遺物には，滑石製やガラス製，土製の玉類，土師器，須恵器，手づくね土器，鎌・刀子の鉄製品，大麦・小麦・野桃の種の炭化物，コブダイの歯などがある。次ぐ，古墳時代終末期では，墓以外の遺構からの勾玉が確認できない。

以上，時期別に勾玉の出土傾向を概観した。次に勾玉の出土状況から，勾玉の用いられ方をみてみることにする。

まず，出雲市の出雲大社境内遺跡では，古墳時代前期の遺物包含層から蛇紋岩製勾玉１点と瑪瑙製勾玉１点，滑石製臼玉12点，手づくね土器１点が確認されている〔大社町教育委員会 2004〕。また，溝やピット群，加えて被熱焼土面が検出されており，そこで祭祀行為がおこなわれていた可能性が高いと考えられている。

次いで，隠岐郡の兵庫遺跡は，島根半島から日本海を挟んで浮かぶ隠岐島の西ノ島にある遺跡である〔西ノ島町教育委員会 1996〕。この遺跡では，調査地区を複数のグリッドに分け，面的に調査おこなわれた。その結果，３つの区画で計４点，うち瑪瑙製勾玉１点，水晶製勾玉２点，滑石製勾玉１点が出土している。勾玉以外にも，それぞれの区画で手づくね土器やガラス製・土製丸玉などの玉類に加え，大麦・小麦・野桃の種が炭化したものやマダイの骨なども確認されている。報告書では，勾玉が出土した３つの区画を含む計５カ所で，祭祀関係遺物の廃棄がおこなわれたと考えられている。また，この遺跡がある台地の一角で，春から夏にかけて祭祀行為がおこなわれていたことも推測されている。ここでおこなわれた祭祀は，人と海との関わり合いに深く関係したものと考えられる。

また，松江市の前田遺跡〔島根県八雲村教育委員会 2001〕は，埋没河川などが発掘調査で検出されており，低湿地遺跡ということができる。この遺跡の発掘調査では，河道の水際付近から貼石遺構が検出されている。河道については縄文時代晩期から流れていたと考えられているが，出土する遺物の中心は古墳時代のものである。その検出された遺構付近から，瑪瑙製勾玉１点の他に水晶製桐切子玉１点，泥岩製臼玉７点の玉類が出土している。また，琴や赤色顔料が塗布された土師器高坏，手づくね土器，土鈴，桃核などの，いわゆる祭祀色の強い遺物も共に出土している。

これらのことを考慮するならば，この場で水を対象とした祭祀行為がおこなわれていた可能性も考えることができるが，それとは別にもう１つの考え方としては，祭祀関係遺物の廃棄場所であるという可能性も想定できよう。これら２つの考えの中では，特殊な遺構の検出およびそれに付随する形で，祭祀遺物が出土することから考えて，前者と考えた方がより妥当ではないであろうか。 11

３．勾玉の性格について

以上，研究分野ごとに研究者が勾玉の宗教的性格についてどのように考えてきたのかを概観した。そして，実際に勾玉がどのように用いられていたかを，古墳時代における島根県下出土の勾玉を参考にしてみてきた。次に，これらの情報をふまえ，勾玉の宗教的性格について考察をくわえてみたい。

古墳時代の人々は，勾玉に装飾性や宝器性，身分の表示などの意味合いを込めていたと考えるこ

ともできるかもしれないが，その一方では勾玉が死者や神の霊と直接的あるいは間接的に関わり合いを有することができるものであるとも考えていたと思われる。たとえば，奥才34号墳の事例をみると，勾玉を石釧と鏡で仕舞い込み，顔料を塗布あるいは散布をおこないない，さらに１対の土師器壺で厳重に封じ込めたかのような状況がみられている。この場合，封じ込めるに値するものが勾玉であり，出土遺構が墓と関係があるとするならば，被葬者の霊魂と勾玉とに密接なつながりがあると考えられる。また，市毛勲氏の「施朱の風習は，赤い色に魂を鎮める呪力がある〔市毛 1962〕」を肯定的にとらえるならば，なおさら勾玉と死者の霊魂との間には関係性が指摘できるように思われる。

墓以外の遺構における勾玉については，水などを対象とした祭祀行為をおこなう際に使用される道具の１つであることはまちがいないといえる。時期によっては墓から出土する瑪瑙や水晶製勾玉に関しても祭祀の道具の１つに用いられていることから，用いられる場面によらず，勾玉の宗教的性格の根底には共通性のある呪的が備わっていると考えられよう。

次に古墳時代を通して，人々の勾玉に対する信仰の変化を考えてみたい。この点について，出土勾玉の材質や共伴遺物，出土遺構の種類などを細かくみていくと，前期・中期・後期・終末期とそれぞれの時期で変化をよみとることができる。

まず，大きな変化としていえるものをあげるならば，中期と後期の間があげられよう。墓では後期になると水晶製勾玉が大きく台頭してくる。水晶製勾玉は中期にも少量みられるが，その時期は最盛期へ向かういわば助走段階の時期であると考える。また，墓以外で用いられる勾玉の中にも，後期になると水晶製勾玉が登場し，異なる場面で同じ材質の勾玉が用いられるようになる。このことから，古墳時代後期を大きな画期として考えることは妥当であろう。そして，このことは，とりもなおさずこの時期に，人々の勾玉への信仰に何らかの変化が起こったといえるのではなかろうか。この画期の要因の１つとして，水晶製玉類と仏教との間には密接な関係性を指摘する見解もある〔田中 2001〕。こうしたことからやや早急ではあるかもしれないが，仏教伝来が少なからず影響をおよぼしているように思われる。すなわち，１つの憶測として，仏教伝来によって，それまでの古墳における葬送と新しく伝わった仏教による葬礼が習合し，その結果，本来，仏の遺骨とされる仏舎利の重要性が認識されるようになった。そうした影響の１つとして，仏舎利を尊ぶ思想が視覚的に共通性をもつ水晶製玉類に影響を与え，水晶製玉類の価値も高まったということができるのではなかろうか。その結果，水晶製玉類が墓の中に副葬品として納められるようになったということが考えられる。

結び

勾玉における宗教的性格の解明については，あまりにも大きくかつ多様性を予想させる問題である。また，勾玉の考古学的研究から，当時の人びとへの精神文化的な考察が困難であることは容易に想像がつくが，あえて一歩踏み込んで憶測を記してみた。それは，仏教伝来を画期として，仏舎利を尊ぶ意識が伝わった。当時の人々のすべてが仏舎利というものについて正しい認識があったかいなかについては疑念があるが，いずれにしても仏舎利を敬う気持ちがあったことは事実であろう。その結果，水晶製玉類と仏舎利とが視覚的に共通性があることから，自ずと水晶製玉類の重要性が高まり，それの宗教的貴重性も高まったと考えることができよう。こうしたことを背景にして，水晶製玉類が墓の副葬品として多く用いられるようになったというものである。

12

しかし，別の地域や時代における勾玉の様相を俯瞰的にみなければならないことや，玉の文化と社会的・政治的背景との位置関係なども検討をおこなうべきである。さらに，当時の人々の霊魂信

仰についても，より一層深く検討することが必要不可欠であり，それら不十分と感じたことについては今後の課題とする。

【註】

註１　『木内石亭全集』巻１の中におさめられている「曲玉問答」の書き始めに，「曲玉問答は天明三年六月の奥書により其著作年代を明にす」とある。

註２　他にも藤貞幹の『集古圖』（1780）がある。『集古圖』（玉器　巻之十一）の中には，丁字頭勾玉３点を含んだ数多くの勾玉が図写されており，出土地点の情報も記載されている。

註３　中国地方における玉類出土遺構が県ごとに集成されており，島根県の集成は，深田浩氏がおこなっている。

註４　「宗教」の基準は，研究者によってそれぞれ異なる。本稿では，宗教の枠組みを明確にすることはせず，あくまで生物の霊魂や神々などの霊的存在を信じることに対して，「宗教的」という語句を用いることにする〔山内 2003，長谷 2010〕。

註５　鹿持雅澄氏も「たま」の義は，「美麗く清明なるを贊いふ称」であったとし，古代の人びとが「タマ」のことを物質的な玉と直接的に結びつけて考えていたとはいえないとしている〔鹿持 1946〕。

註６　水野氏は，「獣牙から勾玉に進化したのならば，獣牙を護符とすることが，殆どどの民族で認められる共通の呪術である以上，勾玉と同一の玉が各地に存在し得るべきはず」として，勾玉の獣牙起源説を否定している〔水野 1969〕。

註７　「人魂のさ青なる君がただ濁り逢へりし雨夜の葬りをそ思ふ」（万葉集巻第十六　三八八九）〔緑川 1962〕から，人の魂の色彩が青色をしていることが読み取れる。また，上野誠氏は，『古事記』に記載されている「倭は　國のまほろば　たたなづく　青垣　山隠れる　倭しうるわし」をとりあげ，そのうちの「青垣」に注目し古代人は，青色の中に緑色の意味合いも含まれていた可能性を指摘している〔上野 2008〕。

註８　松岡静雄氏は，神の名称など神聖視されているものに「チ」が含まれること，そして鈎をチと読むのは「上古生活の必需品を漁労する此の器具を貴重視した」ためとした上で，鈎状の形態には，神秘力・超自然観念・宗教的観念が深く関係していることを指摘している〔松岡 1916〕。

註９　結縛崇拝について，長谷部言人は，「結縛が物件の保持，封蔵，占有，保全，補強，契合，連結，総約，侵害防止等に有効なるを認識して，これをあらゆる物件に施し，福利の増進を祈念するを云う」とし，さらに，結縛は権利の表示でもあると述べている〔長谷部 1930〕。

註10　出土した勾玉のうち１点は，長さ4.6㎝，重さは48.2ｇと全国でみても大きめの勾玉である。また，弥生時代中期後葉のものとされる。

【引用・参考文献】

E.Bタイラー 1962　竹中信常訳『原始文化』：誠信書房。

石田茂作　1940「奈良時代に於ける玉の種類と用途」『考古学雑誌』30-５：323-343．考古學會。

石野博信　2003「上代『玉』思想」『考古学論叢』関西大学考古学研究室開設五拾周年記念：641-681．同朋舎。

出雲市教育委員会　1989『出雲市埋蔵文化財調査報告書』２

出雲市教育委員会　ほか　2009『築山遺跡Ⅳ』

市毛勲　1962「古墳時代の施朱について」『古代』38：30-36．早稲田大学考古学会。

市村宏　1964「玉」『万葉集新論』：135-139．桜楓社。

伊藤雅文　1988「古墳時代装身具の社会性について（覚書）」『考古學論集』網干善教先生華甲記念：423-437．網干善教先生華甲記念会。

13

伊藤雅文　1989「玉・石製品」『季刊考古学』28：48-52．雄山閣。
伊藤雅文　2008「初期倭王権と玉」『王権と武器と信仰』：52-65．同成社。
上野誠　2008「タマとヒスイの古典学 －神と人を魅了したもの－ 」ヒスイ文化フォーラム 2007　ヌナカワとヒスイ －講演記録－ 』：61-67．糸魚川市。
梅原末治　1920『久津川古墳研究』關信太郎
大場磐雄　1962『武蔵伊興』国学院大学研究報告第２冊：文功社。
乙益重隆　1987「壺に埋納した玉」『考古学資料館紀要』樋口清之博士喜寿記念３：39-44．國學院大學考古学資料館。
小山田宏一　1995「副葬品」『季刊考古学』52：48-51．雄山閣。
折口信夫　1976「萬葉集に現れた古代信仰 －たまの問題－ 」『折口信夫全集』９：561-570．中央公論社。
折口信夫　1996「剣と玉」『折口信夫全集』19：23-35．中央公論社。（初出は1931年，上代文化研究会開講演会筆記）
鹿島町教育委員会　1985『奥才古墳群』
金関丈夫　1975「魂の色 －まが玉の起り」『発掘から推理する』朝日選書40：34-40．朝日新聞社。
木内石亭　1936「曲玉問答」中川泉三編『木内石亭全集』巻１：21-41．下郷共済会。
喜田貞吉　1933「八坂瓊之曲玉考」『歴史地理』61-１：１-19．日本歴史地理學會。
木下尚子　2000「装身具と権力・男女」『女と男，家と村』古代史の論点②：187-212．小学館。
木下尚子　2005「階級社会の垂飾　ヒスイ勾玉の誕生と展開 －弥生時代から奈良時代まで－ 」『ヒスイ文化フォーラム2005　神秘の勾玉 － 弥生・古墳時代の翡翠文化』：ヒスイ文化フォーラム委員会。
河野一隆　2002「石製模造品」『考古資料大観』９：331-340．小学館。
後藤守一　1940「古墳副葬の玉の用途に就いて」『考古学雑誌』30-７：500-538．考古學會。
後藤守一　1947「三種の神器の考古学的検討」『日本古代史の考古学的検討』：103-165．山岡書店。
小林行雄　1947「弥生式文化と古墳時代文化」『日本古代文化の諸問題 －考古学者の対話－ 』：61-116．高桐書院。
佐野大和　1981「子持勾玉」『原始神道期二』神道考古学講座　第３巻：109-157．雄山閣。
鹿持雅澄　1946「玉蜻考」『万葉集古義』８：452-457．目黒書店。
篠原祐一　2002「子持勾玉小考」『子持勾玉資料集成』付録：１-８．國學院大學日本文化研究所。
篠原祐一　2006「石製模造品と祭祀の玉」『季刊考古学』94：48-51．雄山閣。
島田貞彦　1932「琉球勾玉考」『歴史と地理』31-１：30-43．星野書店。
島田貞彦　1940「勾玉雑考」『考古学雑誌』30-５：356-367．考古學會。
島根県教育委員会　1997『島田池遺跡　鷸貫遺跡』
島根県教育委員会　2007『山持遺跡 vol. 3 （Ⅳ区）』
14 島根県教育委員会　ほか　1996『徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡』
島根県教育委員会　ほか　1997『岸尾遺跡・島田遺跡』
島根県教育委員会　ほか　2001a『熊谷遺跡・要害遺跡』
島根県教育委員会　ほか　2001b『塩津丘陵遺跡群　小久白墳墓群』
島根県教育委員会　ほか　2005『中野清水遺跡（２）』
島根県古代文化センター　2004『古代出雲における玉作の研究Ⅰ －中国地方の玉作関連遺跡集成－ 』
島根県古代文化センター　2005『古代出雲における玉作の研究Ⅱ －中国地方の玉製品出土遺跡集成－ 』

島根県三刀屋町教育委員会　1984『東下谷横穴群発掘調査報告書』
島根県八雲村教育委員会　2001『前田遺跡』
島根大学考古学研究会　1983「古浦砂丘遺跡の問題」『菅田考古』16：1-20. 島根大学考古学研究会。
椙山林継　1998「玉と魂 －石製品の祭り－ 」『日本の信仰遺跡』：157-174. 奈良国立文化財研究所。
大社町教育委員会　2004『出雲大社境内遺跡』
高橋健自　1911「第６章　八坂瓊勾玉考」『鏡と劍と玉』：214-217. 冨山房。
高橋健自　1928「勾玉と鈴に就いて」『考古學雑誌』18-７：373-384. 考古學會。
高橋健自　1929『考古學講座　埴輪及葬身具』12：雄山閣。
辰巳和弘　2004「勾玉，そのシンボリズム」『地域と古文化』：370-379.『地域と古文化』刊行会。
田中史生　2001「奈良・平安時代の出雲の玉作」『出雲古代史研究』11：10-29. 出雲古代史研究会。
谷川士清　1774『勾玉考』
田原本町教育委員会　2008『唐古・鍵遺跡Ⅰ』
玉城一枝　1994a「古墳構築と玉使用の祭祀」『博古研究』８：12-34. 博古研究会。
玉城一枝　1994b「土器に入れた玉」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅥ：449-463. 同志社大学考古学シリーズ刊行会。
玉城一枝　1999「古墳時代の頸飾り」『考古学に学ぶ －遺構と建物－ 』同志社大学考古学シリーズⅦ：415-432. 同志社大学考古学シリーズ刊行会。
坪井正五郎 1886「坪井正五郎日」『東京人類學會報告』１-８：162. 東京人類學會。
坪井正五郎 1891「曲玉考材料」『東京人類學會報告』７-69：102-103. 東京人類學會。
寺村光晴　1966「玉作名郷・社成立試論」『房総文化』：12-34. 房総文化研究会。
寺村光晴　1972「「たま」の系譜 －古代玉概念の再検討－ 」『和洋国文研究』８：56-63. 和洋女子大学国文学会。
寺村光晴　1980「第一章　研究の基礎的前提　ニ　玉の性格と変遷」『古代玉作形成史の研究』：43-56. 吉川弘文館。
中山太郎　1930「第４章　巫女の呪術に用ゐし材料　第２節　呪術の為に発達した器具」『日本巫女史』：162-171. パルトス社。
西ノ島町教育委員会　1996『兵庫遺跡』
野本寛一　1975「玉と砂と　１玉の伝承」『石の民俗』日本の民俗学シリーズ１：239-262. 雄山閣。
羽柴雄輔　1886「管玉曲玉ノ新説」『東京人類學會報告』１-８：160-164. 東京人類學會。
長谷千代子 2010「宗教」星野英紀ほか編『宗教学事典』：198-203. 丸善株式会社。
長谷部言人 1930「結縛崇拝 “Obligoismus”」『人類學雑誌』45-10：385-391. 東京人類學會。
原田敏明　1948「「たま」について」『日本古代宗教』：97-112. 中央公論社。
廣瀬時習　1995「弥生・古墳期の玉の使用形態と意義 －玉副葬の歴史的展開－ 」『文化史學』52：１-23. 文化史学会。
広瀬町教育委員会　2003『経負坂古墳群Ⅱ』
深澤芳樹　2008「ヒスイの色について」『ヒスイ文化フォーラム2007　ヌナカワとヒスイ －講演記録－ 』：52-60. 糸魚川市。
藤貞幹　1780『集古圖』玉器　巻之十一
藤田富士夫 1992「第３章日本ヒスイ文化の特質　第２節最後の勾玉文化」『玉とヒスイ －環日本海の交流をめぐって』：122-138. 同朋舎。
藤田富士夫 2008「万葉集「ヌナカワの底なる玉」をめぐって」『ヒスイ文化フォーラム2007　ヌ

ナカワとヒスイ －講演記録－ 』：68-78．糸魚川市。
松江市教育委員会　ほか　1999『本庄地区県営圃場整備事業に伴う松江北東部遺跡発掘調査報告書』
松岡静雄　1916「チの観念Chiismに就て」『社會學雑誌』25：22-29．日本社會學會。
松岡静雄　1926a「四，　身餝」『日本古俗誌』：151-178．刀江書院。
松岡静雄　1926b「七，　工藝」『日本古俗誌』：258-318．刀江書院。
水野祐　1952『日本古代王朝史論序説』日本古代史研究叢書　第１冊　謄写版。
水野祐　1969「八　勾玉の謎」『勾玉』：210-222．学生社。
水野祐　1983「第11章　古代出雲の佩玉文化　第３節「三種の神器」と出雲の勾玉」『出雲國風土記論攷』：582-616．東京白川書院。
緑川　1962『日本古典文学大系７　万葉集』４：岩波書店。
望月信成　1961「鏡と曲玉と劍」『古代文化』７－１：１－４．古代學協會。
森浩一　1992「連載　神話と伝説の考古学」『月刊　Asahi』：86-91．朝日新聞社。
山内紀嗣　2003「信仰・宗教」田中琢・佐原真編『日本考古学事典』：433-434．三省堂。
山本清　1960「山陰の須恵器」『開学十周年記念論文集』人文科学篇：48-64．島根大学。
米田克彦　2009「勾玉祭祀の波及 －弥生時代の中国地方を中心に－ 」『考古学と地域文化』：103-122．一山典還暦記念論集刊行会。
米田克彦　2011「四国地方における弥生時代勾玉祭祀の波及」『玉文化』８：23-40．日本玉文化研究会。

【表出典】

第１表～第５表：筆者作成

（受理　平成24年９月19日）